

根釰パイロットファーム
パネルディスカッション記録

世界銀行が日本で実施した農地開発
プロジェクト：その今日的意義



開催日：2013年12月11日

**根釧パイロットファーム
パネルディスカッション記録**

**世界銀行が日本で実施した農地開発
プロジェクト：その今日的意義**

開催日：2013年12月11日

凡例

1. 本記録は、2013年12月11日に国際協力機構（JICA）市ヶ谷ビル2階国際会議場で開催された「セミナー 世界銀行が戦後日本で実施した農地開発プロジェクト：その今日的意義」のうち、根釧パイロットファーム入植者である青野春樹氏と奥山秀助氏が参加されたパネルディスカッションの部分を記録したものである。
2. 付録として、奥山秀助氏の「パイロットファームに入植して～酪農の未来に向けて」及び「農業農村の素晴らしさ」を掲載した。
3. 本記録の編集は、別海町教育委員会生涯学習課が行った。

目 次

■ セミナー開催の主旨	1
■ パネルディスカッション記録	2
■ 奥山秀助「パイロットファームに入植して～酪農の未来に向けて」	14
■ 奥山秀助「農業農村の素晴らしさ」	19

講演者およびパネルディスカッションにおける討論者の略歴（講演・発言順）

中山 幹康

1980年 東京大学農学部農業工学科を卒業。1986年に東京大学大学院農学系研究科農業工学専門課程博士課程を修了し、農学博士号を取得。1986年国際連合環境計画（UNEP）環境管理部に計画官として勤務。1989年から1999年まで宇都宮大学農学部農業環境工学科に助教授及び教授として在勤。1999年から2004年まで東京農工大学大学院連合農学研究科教授。2004年より東京大学大学院・新領域創成科学研究科・教授。

藤倉 良

東京大学理学部を卒業後、オーストリアのインスブルック大学で理学博士号を取得。1984年に環境庁に行政官として入庁、地球環境部環境協力室長補佐などを経て、1995年に九州大学工学部助教授、1999年に立命館大学経済学部教授、2003年から法政大学人間環境学部教授。

梅田 安治

1932年札幌市生まれ。1955年北大農学部農業物理学科卒業。北大助手〔農学博士取得〕・助教授・教授（土地改良学・土質改善学）。1998年北大名誉教授／農村空間研究所長／農業土木学会名誉会員・日本農業工学会フェローなど／北大評議員、北海道開発審議会特別委員、北海道農業農村審議会委員など歴任／農業土木学会学術賞、日本農学会賞、読売農学賞、国際水田水環境工学会国際賞など受賞。

青野 春樹

1957年入植。開拓農協役員、豊原小学校PTA 会長、パイロットファーム開拓資料館運営委員長を歴任。兵庫県明石市生まれ。

奥山 秀助

1958年入植。1961年アメリカ・カリフォルニアにて酪農実習1年間（国際農友会）。1983 年から21年間で春別農協理事、ニューフロンティアファーム会長を歴任。上川郡風連町（現名寄市）にて出生。

加藤 宏

東京大学文学部（アジア史）卒。ハーバード大学ケネディ・スクールで公共政策学修士を取得。JICA総務部、アジア1部、企画部、国内部、外務省（経済協力局、中近東アフリカ局、コートジボワール共和国大使館）、JICA研究所所長を経て2013年10月よりJICA理事（JICA研究所所長を兼任）。

世界銀行が戦後日本で実施した農地開発プロジェクト：その今日的意義

日 時：2013年12月11日（水）14:00 – 16:45

会 場：国際協力機構（JICA）市ヶ谷ビル2階国際会議場

主 催：法政大学人間環境学部

東京大学大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻

桜美林大学大学院国際学研究科国際協力専攻

JICA研究所

後 援：別海町、別海町教育委員会、別海町内農協連絡協議会

〔プログラム〕

14:00 開会挨拶

14:05 セミナーの趣旨説明

14:10 講演「世界銀行の対日援助」中山幹康／東京大学大学院教授

14:30 講演「根釧および上北パイロットファーム」藤倉 良／法政大学教授

14:50 事例報告「篠津原野の水田と世界銀行」梅田安治／北海道大学名誉教授

15:10 休憩

15:20 記録映画「パイロットファーム（短縮版）」上映

15:30 パネルディスカッションおよび質疑応答

討論者（五十音順）：

青野春樹／根釧パイロットファーム入植者

梅田安治／北海道大学名誉教授

奥山秀助／根釧パイロットファーム入植者

加藤宏／国際協力機構（JICA）理事・JICA研究所長

16:45 閉会

セミナー開催の主旨

世界銀行（国際復興開発銀行）は、開発途上国の経済発展を支援するために設置された国際機関です。

日本は1953年より世界銀行の借款受け入れを開始し、1966年までの間に8億6300万ドルの借款による援助を受けました。

日本への援助は電力、造船、自動車、道路、鉄道などのインフラ整備の融資が主体であり、31案件の内2件のみが農業案件でした。

援助には知識や技術の移転が伴います。農業案件も例外ではなく、プロジェクト管理上の革新を日本にもたらしました。

本セミナーでは、世銀案件が日本の農業セクターに及ぼしたインパクトをレビューし、被援助国としての日本の経験が、今後の日本の国際協力にどう反映できるかを考えます。

パネルディスカッション



討論者：根釧パイロットファーム入植者	青野 春樹
根釧パイロットファーム入植者	奥山 秀助
北海道大学 名誉教授	梅田 安治
国際協力事業団(JICA)研究所長	加藤 宏
司 会：法政大学 人間環境学部 教授	藤倉 良

司 会：それでは入植者のお二人から、当時の体験、どのような苦労をされて、どのようなかたちで現在に至ったかということをお話いただければと思います。青野さんお願いいたします。

青 野：私は昭和32年の入植者です。パイロットファーム入植は31年から始まったので、2年目の入植です。私は昭和20年に戦災開拓として、父親と共に15歳で東京から北海道角田村（現栗山町。当時御料林190ha 36戸）に入植し、そこで戸当たり5町歩の払い下げを受けました。私の父親は農業はわかっているものですから、根室というところは耕種農業をやる場所ではない、日本は農耕民族で牧畜民族ではない、あそこは作物が採れる場所ではないと、耕種農業をやるのは反対をされました。

それでも昭和31年に根釧農業試験場、根室支庁、そして現地と視察して、32年に入植しました。

最終的に入ってよかったと思うのは、農地開発機械公団の機械でやって2年で14町4反を畑（草地、馬鈴薯、ビート、燕麦を作り、輸入ジャージー4頭を飼養）にして、公団の後は馬の農機具でやりました。そういうことで非常に我々もやりがいがありました。皆が皆必ずしもそうではないんですね。それから経験がある人たちからすると牛のホルスタインもっていた人からすると、何で最初からもっと面積を与えてくれればという話もありますけれども、私達からすると、戦災開拓や満州・海外からの引き揚げ、復員軍人だとかいろいろな人が入るわけですから、必ずしもそんなに最初から多くの面積をやるわけではない。農林省の計画からいくと、やはり最初からそういうことをやる前提条件（18.8町）で計画したりしていたようですけれども、北海道からの計画では40町だとか、もっと大きい計画を出しています。それだと償還金が多くなりますし、そういったことの中で結局

は18町8反になったのではないかと。最初から10頭20頭の牛を飼えるわけではない。そういつても現在になってみると31年から33年まで床丹第二(現豊原)に187戸が入って、今残っているのは50戸いないわけですね(新酪農村に26戸移転)。それがあって新酪農村というものが発展して、50町60頭の計画になりました。それでも離農者は出るのです。そういう経過をたどって現在は日本一の牛乳生産地と、そういうことになってくるんですけども、50年くらいの間にそれだけの規模になった。ただこれからが問題になりますけれども、現在の中ではそういった形で進んでいます。

司 会：ありがとうございました。奥山さんお願いいたします。

奥 山：私は昭和33年度、青野さんより1年遅れて床丹第2地区の最後の入植者として、根釧パイロットファームに入植いたしました。入植の動機は、昭和32年の8月、友人と2人で根釧パイロットファームの見学をしました。その時、「この広大な大地が、なぜ開発されなかったのか。見たところ、木もまずまず伸びている。草も私の出身地北海道の水田地帯名寄市風連町に負けない。」と思いました。これが入植の動機となり、米作専業農家の水田5ヘクタールの長男が決意しました。家族親戚は猛反対で大変な目にあいました。勘当に近いことも言われました。ただ、親もまだ若いし兄弟も7人、今後の農業経営を考えると広い土地で酪農をしたいと22歳の若さで考えました。

家族親戚にお願い、入植を許してもらったものの、入植の条件がありました。まず酪農の経験があるか、年齢は、妻帯者であるか、婚約者はいると言いました。持参金25万円は何とかなると言って、本当は5万程度でありました。ようやくなんとか合格、45日間の実習から始まりました。33年度の4月から居小屋で7名の協同生活。ここでの仕事は牛舎住宅建設の手伝いと井戸掘り、機械開

墾の手伝いなどを行いました。計画通り建設開墾が進み、昭和34年度個人経営でスタートし、馬・乳牛も導入され、希望に燃え頑張った1年でありました。

共同経営を行っていた33年度入植者2名も土地続きということで共同経営を考えないかと話があり、何回か話した末、共同経営に参加することにしました。しかし32年度入植者の1名が脱退することになり、33年度入植の我々2名と32年度入植3名の計5名で昭和35年度再出発をしました。私達の根釧パイロットファーム開拓農協が資金繰りに大変行き詰まりまして、このため組合員の家計費も計画通りは出せないような形になり、こんなときお年寄りとか女性から「共同だからか家計費も出ないんだ」というようなことが盛んに言われまして、また生産意欲、労働意欲が低下していると思いましたが、この1年は私が場長を引き受けまして、みんなで話し合い最も良い方法を見出したいということで営農をスタートさせました。

この1年は会議の回数も多く、経営が心配されましたが、おかげさまで計画通りの生産で1年が終わり、今後完全共同経営を続けるべきかどうか、1年かけてみんなでじっくり相談してみるという形で進みました。そのときたまたま、営農5ヵ年計画書を、先ほどもお話がありましたように書いてくれと言われました。そしてAランクからEランクまでの5段階に分けて…Eランクはもう離農勧告のようなかたちです。昭和38年3月には共同経営をどうするかと結論を出す日程を決めました。

昭和36年に農業基本法もできましたが、共同経営にはあまり期待できないような形の基本法でした。色々と意見はありましたが、結論は発展的解散をするということで共同経営は解散しました。解散と同時にトラクターを始め、パイロットファームで一番最初に導入していましたが、機械の共同利用というかたちで、経営は個人経営にすることに決定しました。5戸が別々に5ヵ年計画書を提出し、なんとか5戸全戸Eランクは1人も出な

かったことは、なによりよかったと思いました。

個人的なことですが、根釧パイロットファームに入植後、最も辛かったことが3回ありました。1つは道東農場解散と同時に営農5カ年計画書を提出しましたが、そのときは通ったのですが2千円の書き間違いがあったらE層であったと、営農指導所で後日の笑い話になりました。当然経済的にも苦しかったというのが一つの辛かったことです。

次は、交通事故で妻を33歳で亡くしました。子どもは小学校6年生の長女、小学校3年生の長男、小学校入学前の次女3人の子供を残しこの世を去りました。最後に1人息子を17歳でガンで亡くしました。何でこんなに不幸が続くのかと弱気になったり途方に暮れた時に、多くの人、多くの友人に助けられました。経営継続は無理ではないかと世間で噂されていました。その時子供達と相談した時、子どもたちは酪農は好きなので続けたいと言ってくれました。私は、戦争には行っていませんが、第二次世界大戦時の特攻隊の心境になり、酪農経営を続けることに決断いたしました。同時に昔の武将山中鹿之助の月山富田城を見に島根県に行きました。今は石垣しかない城跡で、残された子どものこと、今後の酪農経営のこと色々考えました。

また、中春別農協は何度かの債権農協を乗り越えて、今は牛乳生産12万トン、販売高120億、それから預金残高も118億…これは昔は一般取引などがある業者から預金していただきましたけども、この中身はほとんど組合員の預金でございます。そして現在の農協は理念と信念をもった素晴らしい農協になったと自負しております。また日本の農家一戸あたりの面積は1.5ha、北海道の一戸あたりの面積は25ha、別海町は75ha、私達中春別農協の一戸あたりの耕作面積は80haであります。なお別海町の酪農は牛乳生産量ダントツ日本一になったことを考えると、今から半世紀余り前の別海町は、不毛の大地と言われていましたが、世界

銀行の対日援助による機械開墾は開拓の革命であったと思います。私どもは根釧パイロットファームは大成功となったと考えますが、この事業に多くの人たちが献身的に努力されたことは忘れてはならないと思います。

また、入植当時この事業は、小学校5年生の社会科の教科書にも何年間か載っていました。昭和33年の6月には皇太子殿下が行啓し、パイロットファームの開拓の状況を現地視察されました。また日本各地から毎日のように視察者が訪れ、同時に新聞や雑誌、マスコミの人たちから数多く紹介されました。

司 会：ありがとうございました。引き続きまして、梅田先生お願いします。

梅 田：先ほどのお話にもあったとおり、「北海道でいかに米を作りたがっていたか」というのが重要だと思います。明治時代にいわゆる内地の府県からどんどん北海道に入植していきました。そのときに北海道では、例えば屯田兵は米を作ることが禁止されていました。なぜかという、芋なら植えればすぐその年食べられるのですが、水田をつくってはその年に食べるものが無いわけですから。

そんな歴史を経て、政策の転換もあり、水田稲作は発展してきていました。いわゆる戦後の食糧難のときに、稲作水田に対する願望が非常に強いものでした。そこで篠津地域も復員、帰国者などをかかえて昭和28年に村長さんをはじめ皆で総決起大会までやっているのですが、具体的事業にまで至っていないという状況でした。そんなときに世界銀行の計画がもち上がってきました。それまでの経歴からしても、町村さんは酪農をやったかったのではないかと思います。実際に江別辺りに隣接している農家は酪農でしたから、農林省へ嘆願しようという話もかなり具体的に持ち上がっていたようです。しかし全体的には地域の内外

ともに、水田開発の希望が強かったようです。やはり水田で成功した。周辺では酪農でも成功していますけれども、水田で成功したというのは、願望にも近い水田稲作という強い合意が多くの人々の意思だったからだと思います。

司 会：ありがとうございました。

今回はJICAで行うセミナーですので、技術移転に焦点を当てて考えてみたいと思います。根釧パイロットファームは天から降ってきたようなプロジェクトでした。それを、入植者のお二人が話しになったように、大変なご苦勞をされながら、齒を食いしばって、今の立派な農場に作り上げてこられました。

そしてそこで日本人が培った開墾と酪農の技術が周辺に伝播して、現在の北海道の酪農が形作られたのです。アメリカから来たのは機械と牛だけで、人は来なかったのですが、技術は日本の風土の中で生み出され、広がっていきました。また篠津では、ドナーは酪農を考えていたのですが、日本側がとにかく米を作らせてくれと強く要求して、ドナーがそれを飲んだわけです。与えられた農業機械は、使い物にはならなかった。むしろ日本にあった技術の方がはるかに上だった。つまり事実上資金だけを貰ったということが機動力となって、篠津は現在、立派な米どころになりました。

ですから考えて見ますと、受け手側のモチベーションがすごく大きかったからこそ成功したのだと思います。ここで加藤さんの方から援助機関の立場に立ってコメントをいただければと思います。

加藤：我々援助の世界にいますと、現場で経験することと、ニューヨークとかワシントンとかパリで話すことの言葉の違いに非常に違和感を覚えることがしばしばあります。今、藤倉先生がおっしゃった、受け手側の意思みたいなものも、例えば援助業界では「オーナーシップ」なんて言われるのですが、そういう言葉では、例えば今日い

らっしゃる二人の方言っていらしたような、本当にリアリティーに富んだ、人生をかけたような話というのが、とても表現しきれないと感じるようなことがあります。

今日私が一番ここで学びましたことは、本当に現場で人生をかけておられた方の重みです。我々が援助という世界でこれを翻訳すると、やはり我々のパートナーである途上国の技術者とか農民とかとの間で、どれだけリアルな関係を持ちうるかということが非常に重要だろうと改めて感じる次第です。ただ、リアルな共感を仮にもったとして、それを言葉で表現する際には、やはり我々としては若干違和感があるけれども、オーナーシップという言葉を使わないといけない。すなわち、そのような言葉を使わないと共通のランゲージにならないので、その言葉を使い始めるけども、その言葉を発するときには我々はどういう現場のリアリティーをもっているかということが非常に重要だと、強く感じた次第です。ですから、その辺のこういうリアリティーを感じることも、感性といいますか、それが本当に重要だということを、今日身に染みて学ばせていたところですよ。

援助の文脈において今日のお話から何を学ぶかという点でいくつかあるのですが、少しだけ触れたいと思います。例えば技術移転というものが成功裏になされるにはいくつかの前提条件があるという話がありました。ただ現実には、前提条件というものがプロジェクトの始まる前に、予めある場合であるばかりではないので、前提条件をつくりだすことも含めて何らかの働きかけの中に入れ込むことができるのではないか、というお話があったと思います。私は本当にそのとおりだと思います。例えば小規模な農民たちとともに一緒に働いている普及活動が、どういうときに成功するかというと、一人ひとりの農業者たちがまず自分ができるということに自信を持つ、それから目的を持つ、目的を達成するための適切な手段が与えられるということがいくつか必要なことなのです。

ね。しかし、そのような自信や目的というのは、事業の前提として与えられているわけではかならずしもない。むしろ、そういうことは、信頼関係をつくるというような地道な活動をすることによって、後からうまれてくる、つまり前提条件が活動の過程で生まれてくるということがあると思うんです。

今日の事例からのもう一つの学びは、外部者の役割という点についてです。それから外から来た人…村の援助に携わる人間というのは、どうしても相手国の人にとっては外部者なんですけども、外部者である我々に対する信頼感というのを勝ちうるために色々な努力がされていると思います。場合によってはその信頼感を勝ちうるために一年、一年半、二年と時間をかけることもあって、実はその間東京からはお前ら何やってんだというように現場の専門家から言われることもあるんですけども、結果としてはそのように時間をかけて信頼を勝ち得たプロジェクトだからこそうまくいったということもあります。このような点でも、今日色んな示唆をいただいたお話は我々が現場で実感していることと相当符合するのではないかと思います。

さて、私冒頭のご挨拶で、歴史の振り返りが重要だというように申したのですけども、振り返りをするにあたっては、二つの視点が重要かなと思います。一つは、このように個別の事例に即した非常にリアリティーに富んだミクロな話を丁寧に繰り返すこと、そういう振り返りは必要だと思います。そしてもう一つは、例えば世銀との関係においては、もしこれをマクロ的に考えてみて、開発金融というものが日本の戦後の復興においてどう役立ったかというような、そういうレベルで大きく捉えることも必要かなと思います。

最後に、世界銀行というのは、我々援助に携わる人間にしてみれば、若干、権威のある組織ですね。権威の源泉というか、正統性がある組織とみなされると思うのですけども。今日話をうかがっ

ても、少なくとも当時は相当色んなことがあったようだなと思わせるお話がたくさんありました。なぜ根釧大地に世銀がこれほどまでにこだわったのか、非常に興味があります。それから新幹線の建設というプロジェクトは当時、鉄道技術として世界最高水準の技術を駆使したものだだったと思うんですね。そういうことになぜ世銀が融資したのか。世銀における意思決定を見ても、非常に興味深い事例がたくさんありました。だから世銀を別に仰ぎ見る対象として見るのではなくて、リアルな我々とそんなに変わらない人たちが集まっているところである、開発のことを考えている人たちもいるけれども、ポリティクスにされている面も多々あって、そういう集団が世銀というものを構成している、というふうにみて、この大きな組織とうまく付き合っていく必要があると思います。

司 会：ありがとうございました。青野さん、奥山さんにお尋ねしたいのですが、お二人とも入植にあたって親から勘当されたとか家族の大反対があったとかいうわけですが、ご家族あるいはご両親は、何を見て「そこに行ってはいけない」と言われたのか。また、お二人の方は「やれそうだ」とお思いになったわけですけども、そのきっかけというのは何だったのでしょうか？

青 野：私の父親は小笠原の父島生まれなんです。祖父は茨城県農家の次男でしたので独立しなければならず、父島に渡って農業を始めました。祖父は私の父親に、農業をやるなら北大に行けといい、北大で予科に入り、予科をやってから、東京府立一中から入ってきた人がいたんですね。それがみな東大に編入しちゃった。一人だけ残されて、そしてそこから北大から1年後東大に編入し、東大の農学部を卒業しています。祖父は小笠原の開発をやっているわけですけども、祖父にすると、私の父親というのは技術者だから、俺の目の黒いうちは小笠原で農業はやらせないと父にいうわけで

す。それで父親は、埼玉県鴻巣農事試験場、さらに兵庫県明石の試験場に行きました。明石の試験場は当時に農業の最先端技術を持っていたわけですが、そこで園芸部長まで行って農家の指導をし、場長の椅子が回ってきたのですが、国と県の方針によって自分の思うような研究ができないということで、それで結局やめてしまって、海南島の開発に携わっていたんです。そこで資生堂海南島開発株式会社に勤務していたのですが、祖父の死により退社し、昭和17年に父は祖父の事業である硫黄島と台湾の農場経営を継ぎました。

そういう経過をもっていますから、父にするとそもそも日本人は農耕民族であり牧畜民族ではない、また根室というのは気象状況・土壌条件全部調べてみれば分かるのですが、これはとても農業をやるようなところじゃないと考えておりました。

確かに大々的に開発されてはいますけども、結局、牧草にしても、青草の期間は4ヶ月か5ヶ月しかないわけです。その間に80頭から100頭の乳牛から牛乳を600トンとか700トン搾る。そのための飼料をつくらなければならない。そういうことがあるので、これから心配されることは、規模拡大しても要するに例えば機械が大型化すれば償却だとか建物もやらないといけない。ニュージーランドは搾乳施設だけあれば良いのですが、道東は施設が無いと冬の間零下30度くらいになりますし、風も吹きます。そのため非常に施設・機械も大型になります。だから粗収入は大きいけれど、取り前はそんなに大きくないですし、また牛は生き物で搾乳となれば365日勤務のようなものです。それに若い人たちがどれだけ挑戦できるかというこれからの問題があります。以上です。

司 会：奥山さんはいかがでしょう。ご家族の反対はどういうところからきたのでしょうか。

奥 山：日本の農業というのは米作が農業だ、酪農や畜産の農家は農家じゃないという何か変な文

化的な何かがあるのではないかなというふうに思います。根釧原野でも米を作る気になって水田の試験跡地が今でも残っています。ですから、あそこで米をつくるというのは到底考えられないようなことを、国自体があそこで米を試験的に作った経過もあります。

それともう一つはパイロットファームの入植者の中で成功者…成功者というか、何とかやっていた人と、それから脱落した人と大きく二つに分かれます。それで、成功者はほとんどお金を持ってくる暇もありませんでした。極端に言えば裸一貫で来た、そういうような形の中で努力した。ところが全部財産もたたんでお金もがっちり持って、家族で来たということは、もうほとんどといっていいくらい脱落したのではないかなと思います。先ほどもちょっといいましたけども、大東亜戦争の特攻隊の心境…いわゆるもう家にも帰れない、祖国にも帰れない、というような命を投げ出すような意気込みで来た人が成功してるのではないかなというような気がします。

司 会：ありがとうございました。背水の陣ですね。それでは会場の方から質問をお受けしたいと思います。

会 場：いわゆるプロジェクト重視的な形で新設された農地公団が借入金となって日本政府が保障したとございますけども、プロジェクトの成功か成功じゃないかということの一つの大きな要因は、借りた人がお金を返せるか。私はここで申し上げているのは、日本政府なり農地公団が返したという事実ではなくて、入植者の方々がお借りになって、先ほど青野さんのお話にもありましたけども、250万円要求されたうちの5万円程度で来られて、背水の陣で成功されたと思うのですが、極めてハイリスクの仕事であったと。250万円…現在の価値にするとおそらく1億円とかそういったような金額かと思うんですけども、その際に、非常にこ

こで農業経営が圧迫されたということで、個人個人ではお金が回らない方も非常に多かったのではないか。それから書かれている43戸が組合との取引が停止されて、その後どうなったのか。あるいはその10戸で無断離農されたという方が、その借入金をどうされたのか。基本的には政府が保証しているということで返せたということでありますけども、プロジェクトでの中のお金の回り方として果たしてどのような形で対処できたのかということをお聞きしたいと思います。

司 会：それは青野さんか奥山さんにお答えしていただきたいと思います。私の理解では、離農された方の借金は、残った農家の方が肩代わりした、と聞いています。それでよろしいでしょうか？

青 野：ええ、役員がしたのと、それから組合員がいますから、そういったかたちで欠損処理をやったという記憶はあります。

司 会：奥山さんは？

奥 山：大変難しい問題ですけど、みんながですね、先ほどの講演でもありましたけど、一致団結といいますか、これは農協の職員から役員から組合員から皆が協力しあった。これは稀に見るかたちではないかなと。言い換えれば日本人本来の姿ではないかなというような形で開拓に打ち込んだ。それから農協が苦しんだというのは農協組織自体の問題ではないかなと。金融機関である…農林中金はじめ、北海道には信連というのがあるんですよ、農協の上に信連があるんです。この締め付けなんです。一切の金融をストップする。もうそことしか金融取引をしていないから、どこも相手をしてくれるところは無いですし、あとあるとしたら高利貸しです。その高利貸しから借りて組合員の生活費を供給したという実例があります。

そのくらい皆が団結してその苦難を乗り越えました。だから38名とも45名とも言われる人たちの組合員を、農協が、主人公である組合員を強制離農させたんです。これも稀に見る形です。みんな生きていくためにはやむを得ないというような形でやった仕事、このときの決断は断腸の思いだったと、妻沼組合長も何回も話をしていました。

青 野：農協のほうも大変だったんですね。餌や肥料は開拓保証資金という制度で道開連（北海道開拓農業協同組合連合会）から資金を春に借りて、それで秋には払うということになるんです。しかしそれがなかなか滞って、乳代がゼロになった。それでどうしたかということ、農協の参事が全部工面して、農林漁業資金や農林中央金庫の資金などの資金が来るまでの間の一時しのぎとして、系統ではない雪印から一時的に借りるなどして凌いでいたという経過もあります。

司 会：ありがとうございます。それではその後の方。

会 場：世銀も単純にお金を貸しているだけでなく、技術者を派遣して計画づくりをしていたと思うのですが、その辺りの役割分担というか、どのように計画の中で整理していったかを、もしお分かりであればお教えいただきたいと思います。

梅 田：いわゆる現場では世銀をあまり意識していなかったと思うのです。ただ自分たちのプロジェクトをやっているということだったと思うのです。例えば、客土するためにいわゆる事業計画としては、泥炭の下層の粘土を掘りあげて入れるんです。それは非常に困難な工事でした。とにかく技術改良・技術発展をさせてやってきましたね。そのときに何も世銀を意識したわけではない。

ただ、農地開発機械公団を通じて、世銀から機

械などが導入されたというのは大きな力だったでしょう。ただそのときに実は北海道では、ポンプ客土と送泥客土にはっきり分けています。ポンプ客土というのは、いわゆる世銀からの機械を使っている、いわゆるポンプ船で掘削した土を搬送する。送泥客土というのは、普通の土をタンクの水で溶かしてポンプで送る。そのときに泥の質によって、先ほど申し上げましたが、普通土だと砂状になるから送りやすいんですね。そこは技術屋さんの競争があって、お互いに発展したんじゃないかと。

篠津においては粘土で粒子が非常に小さく、畑作や営農作業用機械の走行に対して必ずしもプラスじゃない。そこで山からの土をいれたいという、農家の意向があり、そのための世銀関連の機械では十分対応できず、日本の機械がつくられた。そのとき必ずしも世銀の機械がダメだからというのではなくて、外国のものを使ったけどより利用しやすい自分たちの機械を開発して使うというような意識だったと思います。

司 会：愛知用水では、アメリカからコンサルタントが黒船のようにやってきて、ロックフィルダムなどいろいろのことを教えてくれたわけです。一方で根釧のほうではアメリカ人など外国人が来た形跡が全くみられません。世銀の担当官が事前の調査で来ましたが、そのあとは全然来ていないようです。入植者の方に外国人を見たことがありましたか？と聞いても、来ていないと一様にお答えになります。

営農計画は北海道庁が何度か書き直してはいますが、世界銀行やアメリカのコンサルタントから何かを言われた形跡はなくて、本当に何もなかったようです。機械の操作にしても、英語のマニュアル送られてきただけで、それを日本人のオペレーターが自分たちで翻訳しながら覚えていったということです。

ただし、後になって、北海道庁の方や農家の方が、アメリカに研修に行かれています。…これは

世銀の融資とは別だと思うのですが、奥山さんもアメリカに行かれということで、よろしければ、アメリカにいつ頃行かれて、どのようなことをされたのかお聞かせください。

奥 山：一緒に行った仲間が、今日3人見えています。1年に1回は必ずどこかで集っているのですけども、日本各地から我々の仲間は派遣されました。それで、アメリカへ行ったというのは、道東農場という完全共同経営の中から派遣されたんです。ですから当然アメリカの共同経営を勉強してこいという命令です。だからお金も全部道東農場から出していただきました。それで国際農友会が、私の希望を100パーセント取り入れてアメリカのカンパニーではなくコーポレーションの牧場に入れてくれました。兄弟でやっている牧場です。3名で一つの大きな牧場に入りました。ここでは非常に勉強になりました。

日本人も、アメリカで共同経営で大成功を収めている牧場はたくさんあります。ところが共同経営は日本だけは軒並みつぶれました。イズムでやっているヤマギシの牧場だとかは別海にはあります。それから思想・宗教にかたまった牧場…これはやはり強いですね。ところが僕らは全くの思想の自由、宗教の自由の中で企業的な共同経営という形でアメリカに渡りました。そして1年間勉強してきて、それを発揮することなく解散農場長となったのが私です。これも哀れな人生の1ページです。以上です。

司 会：ありがとうございました。中山教授からありますか？

中 山：プロジェクトとしての評価について、篠津の例をお話いたします。篠津のプロジェクトというのは、世界銀行的に見るとたぶん失敗したと見られています。どうしてかと言えば、最初に予定されていた融資額のうち、実際に日本に対して

もしかしたら、失敗だと評価を受けて終わってしまった過去のプロジェクトの中でも、よくみると、現地に多くの便益を与えていたものが有るかもしれません。そのような視点で、我々は開発援助プロジェクトを見なければいけないということ

会 場：今篠津の開拓をやろうとすると、世界銀行の環境配慮のガイドラインにひっかかってプロジェクトはできないのではないかと思いますのですけども、そういう中で、推進する側、あるいはそれを止める側が、最終的に意見を一致させて同じ答えを出すとするとうとうとうとどこに重点を置いて、議論を進められるべきなのかということに

つきまして…ちょっと難しい質問ですが、アイデアを頂ければと思います。

梅 田：非常に難しい質問というか、今の質問のレベルまで私が到達していないのではと思うのですが。ただ現在の篠津があった形の段階にいますよね。きっちりとスケジュールが決まってゴールが決まって進んだわけではなくて、一つ一つステップを踏んでいったに過ぎないと思うんです。一つ上がることが上がって、その段階で次にいったんじゃないかと。

先ほどからお話を聞いて、どうも我々はきちんと計画があると言ってあまり計画を立てないで、かなり曖昧性を残して進んできているんですね。それが案外うまくいってるんじゃないか。特に農業の場合は応変力とでもいいですか、いろいろな技術が輻輳して進歩していきますよね。そのときに色々なものが進んでくるから、あまり形を決めておいてもできない。むしろそういうステップを踏んだほうがいいんじゃないか。そしてステップを踏んで一段上がっている、これは頭で考えるともっと長い路線を考えてもいいと思うんですが、先ほどから別海のほうでお話がありました。もう引き下がることができなかった、というのですけれども、篠津も当時国有地に残ってしまして、そこへ樺太から引き上げてきた方とか、国内道内の他所からも入ってきて、いずれも皆必死でやったということです。

篠津開発をはじめ第2次大戦後の状況を現在に置くことは困難でしょう。ただ、この種の議論はかなりの幅をもったというか、ある種の曖昧性をもってステップを進めるしかないと考えています。この応変力を容認しての議論は、現代的には容認され難い面も含んでいることは十分承知していますが、農業と環境の課題は相互乗り入れの幅をもつことが必要と考えています。

司 会：ありがとうございました。先ほどの映画

には、木をなぎ倒すレーキドーザが出てきましたけども、あれを今日的視点で見ると環境破壊のそのものということになり、今、同じことがやれるのかなと思っていました。あの地域は牧草地として開発されましたが、それもできずに残されたところが釧路湿原であって、ラムサール条約に登録されています。今の視点で当時のことを見てはいけないうすけれども。

さて、この根釧の記録を後世に残したいということで、奥山さんがご自宅に、夢交流館をお造りになって、資料を集めておられます。また、廃校になった小学校の校舎を博物館にしておられます。その辺のご苦労や農業機械を保管したいという思いもお持ちのようなので、奥山さんにその辺りをお話頂きたいのですがいかがでしょうか。

奥 山：もう終わりに近くなってきたのではないかなと思いますので、もう一言だけ付け加えさせていただきますと思います。今話する中に、今国会者から言われました「思い」というものが入っているのではないかなと思います。

その後床丹第2地区という地名が消え、現在は豊原という地名に変わりました。それから「根釧パイロットファーム開拓農業協同組合」は、「パイロットファーム」という言葉が全くなりまして、今は中春別農業協同組合になりました。今「パイロットファーム」が残っているのは、別海町が主催している42.195キロフルマラソンコースの「パイロットマラソン大会」。毎年1千何百名が集まって盛大にやっています。それから「パイロットフォレスト」。このパイロットフォレストというのは、4か町村くらいが一緒になって、約1万ヘクタールの植林地です。これも日本一です。別海町も一部その中に入っています。それからカーナビなんかで今出てくるのが、パイロットファームの近くにあった道道ですね。本州で言えば県道。が走っていると「パイロットロード」という字が出てきます。これだけが、幸いに現在も使われて

いる慰めになっています。あとは全部消え失せました。それから、その後本当に忘れられたようにこのパイロットファームというのが話題にもなくなったり、聞くこともなくなりました。

そのような時に、東大の中山教授、法政大学の藤倉教授が私のところに三年前から来て、歴史経過だとか世界銀行の対日援助について色々お調べになりました。そして北海道大学で第一回目の講演会、中山先生・藤倉先生が中心となって行いました。二回目は私達の別海町で国際セミナー、アメリカからも来ていただきました。それから三回目は本日の国際協力事業団でのセミナーです。根釧最大の国家事業であったこの開拓、根釧パイロットファームの資料が全く無いといったら、ちょっと怒られますが、残っている資料が本当に少ないんです。ほとんど焼却か何か、処分されていてどこへ行っても無いです。地元の記念碑だとか、あるいは地元の入植者が書いた『根釧パイロットファームの光と影』（芳賀信一著）という本が最も貴重な資料となって残っています。そのような状況の中で、本当に先生方は大変なご苦勞をされて今回の調査、現在の結果になりました。このことは改めて、心から厚くお礼を申し上げたいと思います。

今、歴史を大切にしないという風潮があるのではないのでしょうか。大学でも高校でも中学校でも、歴史の勉強は本当にお粗末、僅かな時間しか取っていないような気がします。このことは大きな失敗に繋がると私は考えています。また根釧パイロットファームの入植者をはじめ、多くの関係者が血のにじむ思いで繋いできたこの歴史を、後世に伝えるべき任務が私たちにあると思います。特に藤倉教授をお願いしてある、今までの調査と2回の講演会を一冊の本にして、歴史として後世に残していただきたいとお願いすると同時に、根釧パイロットファームの歴史的遺産、入植当時のブロック作りの本当に見事な住宅とキング式の牛舎。開拓者がこういうすばらしい住宅と牛舎に入った

ものですから、色々悪くも言われました。そういう中で、画期的な機械開墾といわれたレーキドーザーですよ。できればウィンチで排土板やレーキドーザーを上げ下げする昔の古い型。ほとんどこの古い型でもって、開拓を進めました。これを豊原の資料館に保存し、後世に伝承し、農業農村が有する多面的機能を発揮することにより、農業の振興と、農村地域の活性化を図るよう今後とも私も努力したいと思います。

偏見と独断なんです、農業には多面的機能があるんです。私が本当に苦しい立場になった時、農業には5つの機能があると考えました。これを農業基本法に入れてもらおうと、私は農水省や農水省のOBに要請するために、東京通いをしばらくやりました。今の新しい食料・農業・農村基本法が、今の農業の基本法としてあるのですが、この中で農水省は一口に多面的機能といっています。そのうち小出しに、今6次産業という新しい言葉も出ています。これらが全部含まれているのが、私が月山富田城で考え出した農業がもつ5つの機能で、これを私は酪農の哲学として今まで頑張ってきたつもりです。それをちょっと言わせてください。

一つ目は、なんと言っても、食糧生産供給機能です。世界の人口は今70億人です。皆さんにぜひ農業者として言っておきたいのですが、私の尊敬する先輩に教わったことで、「人間、食料がないということは原子爆弾より恐ろしい」ということなんです。

二つ目は、人格形成教育機能です。新しい基本法の中に組み入れるのに一番苦勞したのが、これなんです。我々のような学の無い人間が偉そうなことを言っているもんだから、東大法学部出の事務次官クラスが、何で農業に人格形成教育機能なんかあるんだと言ったんです。それから文部省もなかなか理解してくれなかった。これは全く古い考え方かもしれないけれど、人格とか教育はできるだけ若いときに、汗にまみれ土にまみれ、体の

限界までの体験をする場所なんです。だから必要なんです。その体験をしたものだけが本当の幸せや本当の喜びを感じられる人間になれるのではないかと、私はこれを哲学として今までやっています。これはアメリカの蘭の帝王松井さんにも教わりました。子どもたちはみんなハーバード大学を出たと、だけどその子どもは小さいときに、小遣いもやらないで、全部自分で働かせて苦労をさせた。それで4人ともハーバード大学を出た。このことは、ギネスブックに載ったそうです。

3番目が地域の活性化機能です。農業が最も大きく地域社会に貢献するのです。第一次産業はいままでのように生産だけでなく、消費者のためにも地域が中心になり、第6次産業実現に努力しなければなりません。

それから4番目は、リゾート保養的機能です。農村の素晴らしい自然、それから景観。これは国民の癒しの場所です。2,300万円というお金をかけて交流館をつくったのも、そのためだったのです。都市と農村の交流。夢伝承というのは根釧パイロットファームを後世に繋ぎたいということで、青野さんたちと一緒につくりました。

それから最後に、国土の保全機能。酪農はデンマークのように、国土の保全と高級栄養食品を生産している健土健民の思想により肥沃な土づくりがなされているんです。ですから不毛の大地といわれたこの別海町は、今は緑の大地です。この50何年かの間に 本当に変わりました。このことを私は自負しています。

根釧パイロットファームにおける世界銀行からの対日援助による機械開墾は、日本の人畜力による開墾に革命的な転換をもたらしました。この事業は大成功だと私は考えています。またパイロットファーム事業は、小学校5年生の社会科の教科書にも出ていました。それから昭和33年6月に皇太子陛下が行啓しパイロットファームの開拓状況を現地視察されています。また日本各地から毎日のように視察者が来ていました。それと同時に新

聞や雑誌等のマスコミからパイロットファームの紙面を数多く見ました。そういうような状況の中で、これからも頑張っていきたいと思います。

司 会：ありがとうございました。私がまとめるべきことはすべて奥山さんに言っていただきました。時間も尽きましたのでこれを持ちまして今日のセミナーを終わらせていただきたいと思います。長時間にわたりご清聴いただきましてありがとうございました。

「パイロットファームに入植して～酪農の未来に向けて」

奥山 秀助

パイロットファームへの入植

私は昭和33年度、根釧パイロットファームに入植いたしました。入植の動機ですが、昭和32年の8月、私は友人と2人で根釧パイロットファームの見学をした際、「この広大な大地が、なぜ開発されなかったのか？見たところ、木もまずまず伸びている、草も私の出身地北海道の水田地帯名寄市風連町に負けない。」と思いました。これが入植の動機となり、当時水田5ヘクタールの米作専業農家の長男であった私がパイロットファームへの入植を決意しました。家族親戚は猛反対でした。親もまだ若く、兄弟も7人、今後の農業経営を考えると広い土地で酪農をしたいと22歳の若さで考え、家族親戚にお願い、入植を許してもらいました。しかし入植には酪農経験があるか、年齢、妻帯者であるか、婚約者はいるか、持参金25万円は用意できるか、といった条件がありました。持参金25万円は何とかなると言いましたが、本当は5万程度しかありませんでした。ようやくなんとか合格し、45日間の実習から始まりました。33年度の4月から居小屋で7名の協同生活。仕事は牛舎住宅建設の手伝いと井戸掘り、機械開墾の手伝いなどでした。計画通り建設開墾が進み、昭和34年度個人経営でスタート、馬・乳牛も導入され、希望に燃え、頑張った1年でした。

共同経営への参加とアメリカでの実習

34年度の秋頃から、何人かで今後の経営のあり方等を議論する中で、マスコミ、学者達から近いうちに農業の基本法が発表されて、農業は変わるとの話になり、我々も考えるべきとの話になりました。その頃、32年度の入植者4名で共同経営を行っていました。我々33年度入植者2名も土地続きなので共同経営に加わらないかとの話があり、何回か話しあった末、共同経営に参加することにしました。しかし32年度入植者の1名が脱退することになり、33年度入植の我々2名と32年度入植3名の計5名で、昭和35年度再出発しました。目的は儲かる企業的完全共同経営でした。また、パイロットファームで初めてトラクター附属農機具セットで導入し、機械化農業の第一歩を踏み切った新しい年となりました。



アメリカでサイレージ作りをする私

当時はビート・馬鈴薯を耕作していたので、農場の作業の他に入植者に頼まれ、春先は24時間トラクターが稼働しました。この年は乳牛も畑作トラクターも計画を大きく上回り、良い年でした。今後の規模拡大と企業的な経営等を考え議論する中で、外国の共同経営の牧場で学んできてはどうかとの話になり、何回か話している中で私に国際農

友会のアメリカ農業実習生1年間の試験を受けるようにとの話になり、私も考えていたので試験を受けることにしました。試験は合格。昭和36年4月6日プレジデント・ウィルソン号にて横浜から出航、2週間かけサンフランシスコに着きました。希望通りの牧場で1年間の実習を無事に終わり、帰りは飛行機で昭和37年4月16日帰国しました。

共同経営の解散

私の帰りを道東農場のみんなが待っていました。まず場長が私に相談があると言って話し合いが始まりました。場長は、今後みんなをまとめていく自信がないと色々なことを話してくれました。その上私に農場長を引き受けてくれ、頼む協力するからとの話になり、まもなく通常総会を開き、決算、事業計画、役員改選となりました。全員の賛成で私が場長に決定しました。



パイロットファームで一番最初に導入されたトラクター。右が私、上に載っているのが妻。

共同経営には、大きな問題点が何点ありました。まず私達の根釧パイロットファーム開拓農協が資金繰りが出来なくなっていました。

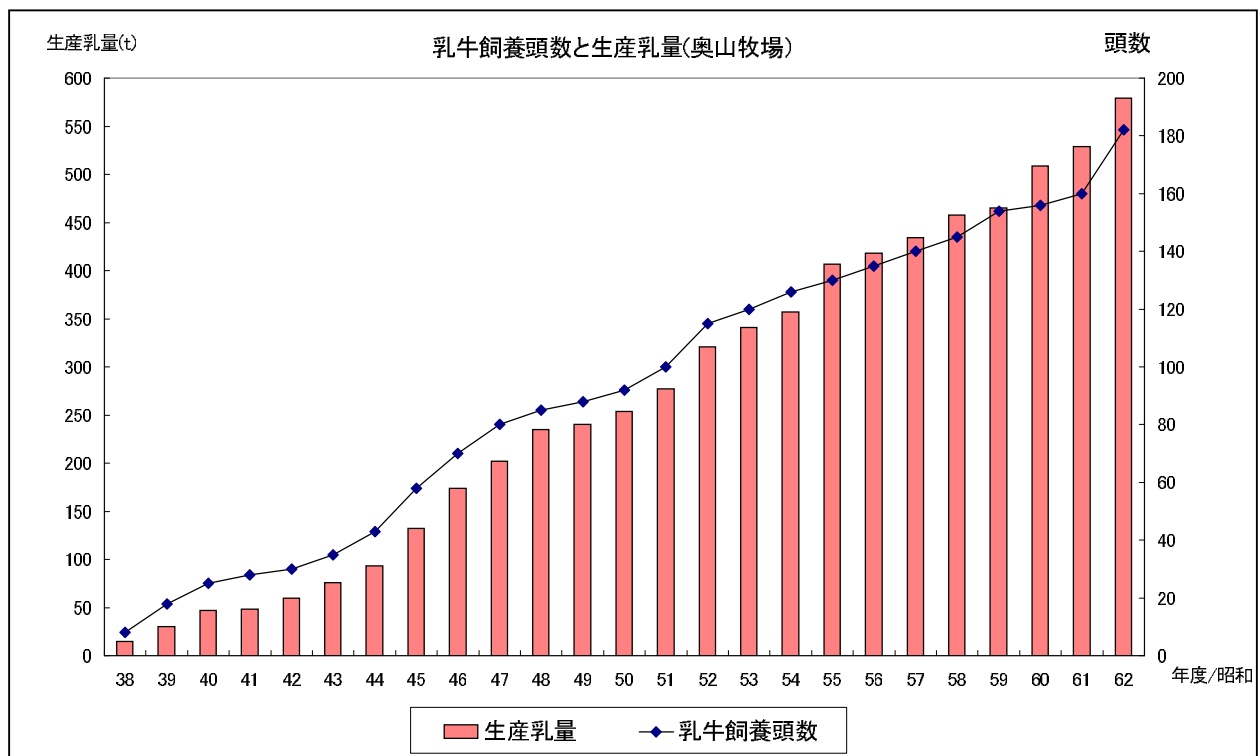
このため組合員の家計費も計画通りは出せないようになり、お年寄りや女性から、共同だから家計費も出ないと言われるようになりました。また、生産意欲、労働意欲が低下していると思いました。しかしこの1年は、みんなで話し合い最も良い方法を見出すことで営農をスタートさせました。この1年は会議の回数も多く、経営が心配されましたが、計画通りの生産で1年が終わり、今後完全共同経営を続けるべきかみんなで何回も会議を開きました。特に今農協、営農指導所が考えている営農5ヵ年計画書を出してもらい、AからEまでの5段階に分ける話もあり、昭和38年には結論を出す日程が決まりました。農業基本法もできましたが、共同経営にはあまり力が入っていないこともあり、色々と意見はありましたが、結論は発展的解散をするということで共同経営は解散、トラクターを始め機械の共同利用で個人経営にすることに決定しました。個人経営になり、5戸が別々に5ヵ年計画書を提出しました。なんとか5戸全戸Eランクは1人も出なかったことは、なによりよかったと思います。

勇気、決断、信念、実行

その後若い経営者で酪農青年研究会を立ち上げ、家族経営の規模を始め、色々と議論を重ねました。当時私はア



メリカ帰りということで、意見を求められることが多かったのですが、夫婦2人の家族経営で搾乳牛50頭の規模は最低でも必要だと話しました。若い経営者は理解しましたが、年上の経営者にはまったく理解してもらえませんでした。そこで私達は考えました。数字を入れないで、ゴールなき規模拡大。この



言葉は、私達が考えた言葉を目標にして「勇気・決断、信念・実行」、すなわち勇気をもって決断し信念をもって実行するをモットーにして努力しました。関係機関のご協力と多くの友人に支えられ、根釧パイロットファーム入植者の中で1番早く私がこの目標を達成しました。

また中春別農協は何度かの再建農協の危機を乗り越え、今は牛乳生産12万トン、販売高120億円、預金保有高118億円と、現在農協は理念と信念を持った素晴らしい農協になりました。

また日本の農家1戸当たりの耕作面積は1.5ha、北海道の1戸当たりの耕作面積は25ha、別海町1戸当たりの耕作面積75ha、私達中春別農協の1戸当たりの耕作面積は80haです。その陰では、日本一の規模といわれる交換分合事業（床丹AB工区合わせて8,600ha）と新酪農村への再移転（新酪94戸のうち62戸がパイロットファームからの移転）という大事業があったのです。

今から半世紀余り前の別海町は不毛の大地と言われていましたが、世界銀行の対日援助による画期的な機械開墾は開拓の革命でした。別海町の酪農牛乳生産量はダントツの日本一になったことを考えると、根釧パイロットファームの国家事業は大成功であったと思いますが、この事業に多くの人が献身的に努力してくれたことは忘れてはなりません。機械公団の皆様方またオペレーターには、考えられない苦労がありました。また別海町の前町長佐野力三氏は役場職員の時、上杉町長から、君は役場の職員か中春別農協職員かと言われる程農協に通って問題解決に努力されました。後日、佐野別海町長として農協が大変な時の総会には必ず来てくださったことは忘れてはならない。これらのことは、後世に歴史として伝えるべきであると思います。

最も辛かったこと

私が根釧パイロットファームに入植後最も辛かったことが3回ありました。1つは道東農場解散です。解散後に営農5カ年計画書を書きましたが、2千円書き間違ったらE層であったと営農指導所で後日の

笑い話になりました。

次は、交通事故で妻を33歳で亡くしたことです。小学校6年生の長女、小学校3年生の長男、小学校入学前の次女3人の子供を残し、この世を去りました。

最後に1人息子を17歳でガンで亡くしました。何でこんなに不幸が続くのかと弱気になり途方に暮れた時、多くの人、多くの友人に助けられました。しかし、経営継続は無理ではないかと世間で話されていました。子供達と相談した時、酪農は好きなので続けたいと言ってくれました。私は第二次世界大戦時の特攻隊の心境になり、酪農経営を続けることを決断しました。同時に昔の武士山中鹿之助の月山富田城を見に島根県に行き、今は石垣しかない城の跡で残された子どもの事、今後の酪農経営の事色々考えました。

農業の社会的機能

私は5つある農業の役割・機能を酪農哲学としました。

①食糧生産供給機能—世界の人口は今70億人です。「人間、食料がないということは原子爆弾より恐ろしい」ということなのです。

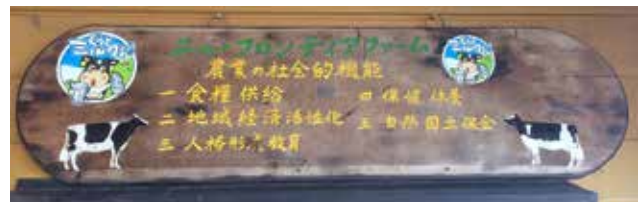
②人格形成教育機能—人格とか教育はできるだ

け若いときに汗にまみれ土にまみれ、体の限界まで体験することです。

③地域の活性化機能—農業が最も大きく地域社会に貢献するのです。第一次産業はいままでのように生産だけでなく、消費者のためにも地域が中心になり、第6次産業実現に努力しなければなりません。

④リゾート保養的機能—農村の素晴らしい自然と景観こそ、国民の癒しの場所です。数多い小鳥・リス等を見ながら森林浴ができるのも農業の機能です。

⑤国土の保全機能—酪農はデンマークのように、国土の保全と高級栄養食品を生産している健土健民の思想により肥沃な土づくりがなされています。不毛の大地といわれたこの別海町は、今は緑の大地となり、生乳生産量は断トツ日本一です。世界銀行の対日援助による根釧パイロットファームの機械開墾は、これまでの人畜力による開墾からの革命的な転換となりました。この事業は大成功であったと私は考えます。この50何年かの間に本当に変わりました。このことを私は自負しています。



農業のもつ5つの社会的機能

パイロットファーム歴史の伝承

この根釧パイロットファーム事業は、小学校5年生の社会科の教科書にも出ていました。昭和33年6月には皇太子殿下が行啓され、パイロットファームの開墾状況を視察されました。また、日本各地から毎日のように視察、バスで見学者が来ていました。それと同時に新聞その他雑誌、マスコミでも、根釧パイロットファームが数多く紹介されました。

その後地名も「床丹第2地区」から「豊原」へと変わり、「根釧パイロットファーム開拓農業組合」は「中春別農業協同組合」となり、「パイロット」の文字が無くなりました。今は幸いにも、「パイロットマラソン」、「パイロットフォレスト」、「パイロットロード」に「パイロット」の文字が使われています。

その後忘れられたように、パイロットファームには話題にも記事にもならなくなりました。そのような中、東大の中山教授、法政大学藤倉教授が3年前から現地に入られて歴史等の調査をされ、北海道大学での講演会、別海町での国際セミナー、国際協力事業団でのセミナーを開催されました。戦後最大の国家事業で開拓した根釧パイロットの資料があまりにも少なく、調査には大変な苦労があったこと、改めて心から厚くお礼と感謝を申し上げます。歴史を大切にしない今の風潮は大きな失敗に繋がると私は考えます。また、根釧パイロットファームの入植者を始め、多くの関係者の血のにじむ思いで築いてきた歴史を、我々は後世に伝える任務があると思います。根釧パイロットファームの歴史的遺産である、入植当時の住宅と畜舎の保存、画期的な機械開墾を行ったレーキドーザーを豊原開拓資料館に保存して後世に伝承し、農業農村が有する多面的機能の発揮により農業の振興と農村地域の活性化を図るよう今後も努力したいと思います。

農業農村の素晴らしさ

奥山 秀助

はじめに

1年に1度は必ず旅行に出る事を計画したい。井の中の蛙大海を知らずとならぬよう、何年に1度はヨーロッパ北米を中心に外国旅行に出る必要を感じている。考え方、物の見る目が大きく変わる

世界の人口が70億人を超えた今、世の中は大きく変わろうとしている。どんなに世の中が進歩しても、人間が月に行くことができるようになって、宇宙基地までに旅行できる今日でも、人間はやはり食べ物がなければ生きていけない。人間食糧がないということは原水爆より恐ろしいといわれている。日本の食糧は本当に心配ないのか。我々は食料を生産している農業者だ。農業は人格形成教育機能など多面的機能を発揮している。農業、農村の素晴らしさと誇りの持てる職業であることと、無くすことのできない職業であることを農業者自身が自覚すべきである。地域の特徴を活かした農材の環境整備を進め都市住民が住んでみたくなる農材環境造りに努力を重ね、名実共に素晴らしい別海町の酪農村を作りたい。

私は根釧パイロットファームに入植以来、毎年木を植えてきた。湿地とか傾斜地屋敷防風林などの面積が広い所は森林組合の補助事業で植林した。庭木果樹その他は毎年植えてきた。樹齢100年—400年の羅臼根室産イチイ（オンコ）を、100本屋敷林としている。種から育てたイチイが1,000本以上ある。シンパクは挿木で増した。モミジも種から増え1000本以上になった。また、ハクサンシャクナゲも100本程植えた。元農業改良普及センターの榎本所長の指導により、スモモ、エゾノコリンゴ、ナツグミ、リンゴ、クルミ等、実のなる木で並木を作った。このことでシマリス・エゾリス、数多くの小鳥が来るようになった。シマリスは入植当時からいたが、エゾリスは見たことがなかった。だが15年ほど前から豊原で1番早くエゾリスが姿を見せた。今では数が増え豊原の各地で見られる様になった。小鳥も30種類以上毎日姿を見せてくれるなど、素晴らしい癒しの場所になった。私が80才を記念して植えたエンジュの木で別海の酋長ホロヤを始め、先住民アイヌの木彫りを200余り作った。この木彫は魔除けとも言われている。



エンジュの木で作った木彫りの人形

山のない別海町

13万5000ヘクタール。県と同じ程の広い別海町に山がひとつもない。だが私の所から見える山並は国後島の爺爺岳から知床連山の硫黄島、雄阿寒岳、雌阿寒岳までの連山など、道東知床連山の眺めを一望できる素晴らしいところだ。

曲がりくねった別海町の川

延長150キロに及ぶ最大の川である西別川を始め、風蓮川、床丹川、春別川、当幌川が別海原野を東流、オホーツク海に注いでいる。どの川も人工的に改修がなされた所はまったくないのが別海町の原始の川だ。秋に大雨が降ると、私の牧場の名もない小川に毎年鮭が回帰してくる。都市からの修学旅行生が手づかみで4kgもある鮭を引上げ写真を撮り、終るとまた川に戻す。別海町は本当に自然の宝庫である。なお西別川の鮭は献上鮭として今でも日本一である。また当幌川春別川は尾岱沼の野付湾に流入している。床丹川、西別川は直接外洋オホーツク海に注いでいる。ポンヤウシュベツ川、ヤウシュベツ川、風蓮川は風蓮湖に流れている。

別海町にはなぜ石ころが出ないのか

それは別海町全域に火山灰が何べんも何べんも降りつもり、それが長く堆積しているからである。摩周火山を主とし、遠く雌阿寒岳からの火山灰を堆積している。別海付近では深さ70メートルの地下までが火山灰であることが推定されている。数多い川に石ころがない日本で珍しい別海町の大地である。この大地の開発が遅れた大きな原因の1つが石ころがないことにある。生産物を運搬する道路に石が入っていない。大雨が降った時は馬車も通れない。とくに春の雪解期は通行止めとなる。これが昭和30年代までの別海町の道路であった。根釧パイロットファームの建設と開拓方式が進むと同時に、別海町の道路も良くなって来た。しかし道路に敷きつめるような砂利は、別海町内のどこにもない。すべて隣接市町村のプラントから運搬してきた。大変大きな予算を毎年計画道路に力を入れた上杉町長。自ら「私は道路町長だ」といって最重点事項として取組み、別海町の道路も改装率70%舗装率26パーセントになった。町道496本、総延長1,103キロメートルで佐野町政がスタート。引き続き道路を最重点施策としてスピードを上げ整備を進めてきた。佐野町長が目指した舗装率50パーセントは平成11年度に達成した。町道以外の道路道道254キロ、国道119キロメートルと今建設中の地域高規格道路、釧路一中標津道路、根室一中標津道路等があるが、5年程前から全道路の工事の進みが大変悪い。今後が心配である

別海町の水道(飲料水)

水源はまず摩周湖の伏流水。周囲20キロ最大深度212メートルで阿寒国立公園の最東端に位置するアイヌ名はカムイトー。湖に出入りする河川はなく、かつては世界一の透明度41.6メートルを誇っていたが、最近では19メートルになってしまった。昭和45年、根釧パイロットファーム地区飲雑用水施設事業の完成と同時に、別海町では摩周湖の伏流水西別川支流の国有林に有るコトンナイ川の水利権を取得し、別海町全町の水道事業に備えた。昭和48年度を初年度とする国営事業、新酪農村建設事業が認められたことにより、同年度事業費7億円をもって釧路開発建設部が事業着手、取水地点を国有林内コトンナイ川と定め、全給水地区の自然流下方式を導入した。

別海町の自然的条件を見極めながら水道施設を広域化し、住民に清浄、豊富、低廉な水を供給する全町水道化を推進することとなった。目標年次は昭和48年から昭和52年度までの5ヶ年、総事業費は61億9410万円という膨大なものである。この広域水道事業が14万ヘクタールという広大な地域、根釧原

野別海町に送配水管の敷設を行い、その張りめぐらされた総延長770キロメートルに及ぶ。この水は12万頭の乳牛を飼育している酪農家や市街地住民への飲用水供給の役割ばかりでなく、農業、漁業、水産業、商工業、林業、その他産業に用いられており、この摩周の清冽な水を豊富に使えることに深く感謝の念を捧げたい。また63,000ヘクタールに及ぶ畑地のかんがい用水としても大きな役割を担っているため、万全な管理体制が求められていた。農用地開発公団は画期的な管理システムづくりに取り組み、総工費3億円を投じて管理センターを昭和51年10月に完成させた。このシステムで操作する水の使用量は1日24,000立方メートルにも及び、人口20万人の都市の水道に匹敵するものであり、その水道施設の監視、計測、制御、記録を管理センターで操作デスクの1人の技術者によってすべてカバーできるという画期的なシステムは全道でも初めてであり、関係者の注目を集めた。格言「人は水を飲む時井戸を掘った人の労苦に感謝しなければならない。」

後継者のお嫁さん

今までも機会のある度に酪農家の後継者と若妻の育成には微力ながら努力して来たが、結婚していない後継者が地区内に今までにない人数になっている。本人家庭だけの問題でなく地区の問題でもあり、各関係機関を始め地区みんなの協力による解決を急ぎ、日本一の別海の酪農を後継者にバトンタッチしたい。後継者を始め消費者に喜んでもらえる素晴らしい別海町の酪農村になることを願いながら、今まで以上に地元の小学生、中学生、別海の高校生と府県から来る中学高校の修学旅行生、時には大学生等を受入れ、農業、農村の



奥山牧場敷地内にある夢伝承交流館。修学旅行生などを受け入れてきた。

素晴らしさと食の大切さを今後とも話し合い理解をしてもらい、別海町の自然体験を通じて、本当に素晴らしい癒い場であることを知ってもらいたい

おわりに

別海町の基幹産業は第1次産業の農業、漁業である。この50年余りの間に素晴らしい発展をした。だが戸数と人口は毎年減少が続けている。どこまで別海町の人口は減少するか解らないとも言われている。今別海町はどの様に考えているのか。今こそ町行政の舵取りが必要だ。

まず第3次産業の観光産業に別海町は重点を置き、農業、漁業、観光を3本柱として別海町の基幹産業に位置付け、自然の宝庫であり自然な本当の癒い場ともいわれている素晴らしい別海町に、都市住民、

消費者、修学旅行生、その他一般旅行者、外国からの旅行者などに喜んでもらえる別海町になりたい。自然を破壊せずに調和してきた農村でしか体験できない、本物のリゾートが別海町にはあるのだから。外国から日本への年間の旅行者がついに1000万人に達した。別海町には外国から年間何名来ているか？別海町を始め、各関係機関の協力により6次産業に取り組むべきである。大きな加工所を作っても、そこで働く人が他の町からの通勤者では困る。ますますの別海町の発展方策の推進をお願いしたい。

参考文献：『別海町百年史』（昭和53年）

『別海町三十年史』（平成15年）

根釧パイロットファームパネルディスカッション記録
世界銀行が日本で実施した農地開発プロジェクト：その今日的意義

2014年7月発行

発行 別海町教育委員会

〒086-0205 北海道野付郡別海町別海常盤町280番地
別海町内農協連絡協議会

〒086-0205 北海道野付郡別海町別海常盤町280番地

© 無断転載はご遠慮ください。